

論文内容の要旨

専攻名	多文化社会学 専攻	氏名	光岡 華子
題名	長崎における「原爆教育」の特徴と変遷過程 —被爆者なき時代に向けた「原爆教育」の課題—		
<p>論文内容の要旨</p> <p>本研究の目的は次の二つである。</p> <p>(1) 長崎の「原爆教育」の特徴と変遷過程を明らかにする。</p> <p>(2) 被爆者なき時代における、「原爆教育」の課題を明らかにする。</p> <p>本研究の背景には、戦後75年を経て必然的に「平和教育」において戦争や原爆を扱う時間が減っている現実がある。このような中では長崎で平和教育と呼ばれ実施されている教育は特殊な「原爆教育」に他ならない。かつて「被爆教師（被爆の体験を持つ教師）」が目指した「原爆教育」は、決して原爆被害についてのみ学ぶことを意味するのではなく「原爆に関する知識の習得や体験的な学びを通じて戦争や核兵器廃絶について考える平和教育」を指していた。</p> <p>長崎の「原爆教育」の組織的な始まりは、1970年に長崎市及び長崎県被爆教師の会が発足したことである。ここから現在に致るまでの「原爆教育」を、創成期（1970年～1980年代後半）・拡充期（1980年代後半～2000年代後半）・転換期（2000年代後半～現在）の三つに区分し、各時期の事例を取り上げ変遷過程と特徴を追った。各時期の特徴は、創成期：被爆教師による原爆教育の組織化及び体系化、拡充期：担い手の多様化に伴う「原爆教育」の被爆体験への偏り、転換期：被爆者なき時代に向け対話を重視した「原爆教育」への転換である。</p> <p>以上の変遷過程の分析より、今後の「原爆教育」の課題として以下の三点が明らかになった。</p> <p>(1) 被爆教師・被爆者への依存構造</p> <p>創成期では「原爆教育」の担い手は被爆教師であった。被爆教師は教育現場で「原爆教育」の主導、組織化、体系化及び行政からの抑圧に抵抗・抗議を行った。拡充期になり退職した被爆教師は、非教師の被爆者とともに学校外教育において体験講話などの活動に取り組み大きな役割を果たした。さらに、教育現場では行政からの抑圧に抵抗しつつ次世代への継承、子どもの学び形成なども担った。このように「原爆教育」の特徴は、退職した被爆教師や被爆者が重要な役割を担うという依存構造であり、それが現在も続いている。</p> <p>(2) 被爆教師が目指した「原爆教育」と現行の「原爆教育」の隔たり</p> <p>被爆教師が推進した「原爆教育」では、取り扱うべき内容として原爆及び現代の核兵器の非人道性、加害責任を含む戦争全体の実態と構造、戦時下の人々の生活と人権という要</p>			

氏名	光岡 華子
<p>素が挙げられた。言い換えれば、被爆教師が目指した「原爆教育」は決して被爆体験だけを学ぶものではなかった。ところが、長崎市教育委員会が平和教育の内容を学習指導要領やそれに基づく教科書の範囲にとどめる方針を示しているため、戦争や核兵器廃絶に関する内容は含まれていない。その結果、扱われる内容の大半が被爆の実相となっている。これが『原爆教育』＝被爆体験の継承」という認識を導き、現場教師にも影響を及ぼした。特に被爆教師の退職後は、現場には体験を語れる人がいなくなり、被爆体験の継承も「原爆教育」も被爆者が主体となって行う構図が完成し、被爆体験の継承と「原爆教育」のそれぞれの役割が曖昧になった。</p> <p>こうして「原爆教育」は被爆体験の継承を行う場と捉えられるようになり、被爆教師が目指した「原爆教育」との隔たりが生じた。</p> <p>(3) 「原爆教育」が抱える特殊性と普遍性の二面性</p> <p>市教委は1978年に「平和に関する教育の三原則」を初めて示した時から一貫して、「平和教育」は「普遍性・妥当性を踏まえて特殊性を生かす」としている。普遍性は世界恒久平和の実現という人類共通の願い、妥当性は「公正中立」で学習指導要領に基づく内容の取り扱いを意味する。特殊性は長崎が原爆被爆都市である事実を指す。原爆体験を二度と繰り返すべきではないというメッセージは、市教委が打ち出している「普遍性」(非人道性)と「特殊性」(被爆体験)を共存させたものといえる。しかし現実には、市教委は常に普遍性を前面に出す方針を示しており、被爆者なき時代を前に徐々に特殊性が弱められていることが明らかになってきた。「原爆教育」には、この「普遍性」と「特殊性」の二面性の確保が必要だが、それが崩れてきているのが現状である。</p> <p>最後に、被爆者なき時代における「原爆教育」の上記3つの課題から得た示唆を記す。</p> <p>第一に、被爆者のいない時代が目前に迫っていることから、今後の「原爆教育」は脱被爆者依存を図らねばならない。そのためには、「原爆教育」の内容として被爆体験だけでなく戦争の全体構造を含めた客観的な内容を扱うことが必要だ。第二に、「原爆教育」は非戦争体験者が行うことができ、教育する側の意識改革も求められる。子どもが戦争や原爆の話と今の繋がりに気づき、当事者意識を持てるようにするためには、先に教育者自身が当事者意識を持つ必要があるだろう。</p>	

ABSTRACT OF THE THESIS

Major	The graduate school of global humanities and social sciences	Name	Mitsuoka Hanako
Title	Features and changing process of “atomic bomb education” in Nagasaki - The issues for the age of declining Hibakushas -		
<p>Abstract of the thesis</p> <p>There are two purposes in the thesis and those are following.</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Clarify the features and changing process of “atomic bomb education” in Nagasaki. 2. Identify issues of “atomic bomb education” in the age of declining Hibakushas. <p>As a background of this study, there is an inevitable fact that Japanese people are spending less time on studying wars and nuclear weapons in “peace education” because 75 years have already passed since the dropping of atomic bomb in Japan. Under such a circumstance, Nagasaki has been conducting a unique peace study which commonly known as "atomic bomb education". It was not only focusing on damages caused by atomic bombs but “atomic bombed teachers” who have survived in the nuclear explosion were aiming to conduct “atomic bomb education” that makes students think through the knowledge of nuclear weapons and experiential learning comprehensively in order to figure out what is the best solution for nuclear disarmament.</p> <p>The systematic "atomic bomb education" in Nagasaki began in 1970 with the establishment of the Nagasaki City atomic bombed teachers' association. The "atomic bomb education" from 1970 to today is divided into 3 periods: the founding period (1970s to the latter half of the 1980s), the expansion period (the latter half of the 1980s to the latter half of the 2000s), and the transition period (the latter half of the 2000s to the present).</p> <p>Through the analysis of the above changing process, the following 3 points were clarified as issues of "atomic bomb education" for the future.</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Structural dependence on atomic bombed teachers and atomic bomb survivors. 2. Gap between the "atomic bomb education" originally aimed at by the atomic bombed teachers and the current "atomic bomb education". 3. Duality of peculiarity and universality of "atomic bomb education". <p>The following suggestions were obtained from the above 3 issues of "atomic bomb education" in the upcoming era without Hibakushas. First, "atomic bomb education" must not be over dependent on Hibakushas. It is necessary to deal with objective contents including not only the experience of the atomic bombing but also the overall structure of the war as the contents. Secondly, non-war-experienced people can carry out "atomic bomb education" and it is necessary to change the consciousness of them.</p>			